

Fate/Assassin's
Order —隠れし者達—

両生金魚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アサシンクリードをやっつけて、ふとこれFGOと舞台や人が被りまくってるよなあってなんて妄想が生まれてので勢いで面白そうなシチュを思いつくままに書き殴ってみました。

超ご都合主義設定の上ガチ勢じゃないので細かい設定の食い違いは平にご容赦を

……

目次

F a t e / A s s a s s i n ' s O r
d e r | 隠れし者達 | | 1

F a t e / A s s a s s i n ' s O r d e r — 隠れし者達 —

拝啓、この世界では一目見た事すら無いお父様・お母様。

「先輩！ 次、5時方向から竜牙兵多数来ます！」

この時空では如何にお過ごしされているのでしょうか。

「ほ、ほら、来たわよ！ そんな雑魚チャチャツとやつつけちやいなさい！」

いえ、ひよつとしたらこの時空ですら既にこの世の住人では無くなっているのでしょうか。

「分かってますから大声出して気を引かないでくださいよ!？」

「へっ……っつて、キヤーツ!？」

「所長!？」

「あー、もう!?!？」

直近の骸骨共を片手に持った剣で薙ぎ払い、更に所長に近づく奴らにはM1868の弾丸を叩き込む。何処をどう見ても近代の武器だがこれも宝具の一部……と言えるのかも知れない。明らかに魔術に関わる手合にも効いている。幸い、『原作』主人公より戦

う術が明らかに豊富なのは有難がるべきか、それとも戦いの最前線に突っ込まざるを得ない事態になる事を悲しむべきか。

「よ、よくやったわね立香……まあ、褒めてあげるわ」

「流石です、先輩！」

まあ、何はともあれ……

「しかし、ただの補欠マスターだと思っていたのに凄いね君は……戻ってきたら是非じっくりと調査したいよ」

「お、お手柔らかにお願いしますね……（特にまだ見ぬレオナルドさんは）」

二度目の人生、頑張つて生き抜こうと思います。

2016年に世界が減びると言われ、育てられた組織から訳も分からず人理継続保障機関「カルデア」なんて言う他所から見たら胡散臭いにも程が有る組織に放り込まれて、お前は補欠だと言われて一人追い出され……気がついたら部屋が炎の海で側に居た美少女は下半身が潰され自分ももう終わり、短い人生だったなと達観したら何故か燃え盛る日本の街に飛ばされて……

そんな一言では済まされない出来事の末に、思い出した。前世の事、この世界の事、そして……おそらく2つの世界が混ざり合ってしまった事を。

「何でよりによって藤丸立香が隠れし者の末裔になつてゐるんだよおおおおおっ?!」
 一般人設定何処行つたあああああああつ?!」

そう、自分はFate/Grand Orderシリーズの主人公藤丸立香に転生しておりなおかつ……UBISOFTの大人気シリーズ、アサシンクリードの主人公達の末裔という立場になつてしまつた様で。更にはレイシフトの際に、大量の記憶が脳内に流れ込んだ。いや、遺伝子から叩き起こされた。

ギリシアで、エジプトで、イングランドで、エルサレムで、イタリヤで、アメリカで、カリブ海で、フランスで、イギリスで。その他にも、挙げきれない程に古今東西この地球上のあらゆる地で戦い抜いた先祖達の記憶が、走馬灯の様に凄まじい勢いで駆け巡り……その感情を・痛みを・そして何より経験をその身に刻み込まれる。

「~~~~~」

前世、今生合わせても味わつた事の無い様な凄まじい苦痛と衝動と感情の発源。気が狂いそうだと思つても狂えない苦しみ。永劫の様にも瞬の様にも感じられた時間はまたたく間に過ぎて、目から鼻から口から色々と垂れ流してしまつた姿を後輩に見られてしまった。……ちよつと引かれてたのは傷ついた。ちよつとだけ、傷ついた。

「ええと、先輩……その、大丈夫ですか?」

「まあうん、平気。……多分」

肩を回し首を回し、体の調子を確かめると、身体の内を感じる不思議な力。これが魔力だと、直感的に分かる。体の調子も、経験した事が無い程にすこぶる元気。

「だけど、丸腰か」

この身体と経験ならば、丸腰でも最低限自衛は出来そうだがなんとも心もとない。

「大丈夫です先輩、私が守りますから」

そして、隣には守ってくれる気が満々の後輩でありデミサーヴァント。だが、守られるだけというのもやはりどうか何と言うか、男として何だか辛い。

「うん、ありがとうマシユ。……でもせめてアサシンブレードが有れば……」

「あさしん……ぶれーど？」

首をかしげるマシユを尻目にはあ、とため息をついて右手を見る。出てくれないか何となく思ったら、唐突に箆手が現れた。

「えっ」「えっ」

後輩と二人で同時にびっくり。試しに甲を曲げてみると、凄まじく鋭い刃が飛び出した。

「えっ」「えっ」

これはひよつとするとひよつとして……

「出ろっ！」

「どう見ても友好的には見えないし、とりあえず戦ってから考えよう！ 行けるかい、マシユ？」

「は、はい！ 行けます了解です！」

とりあえずは、生き延びてからゆっくり考えよう！

これは、俺とカルデアと隠れし者ご先祖様達の紡ぐ、グランコナード聖杯探索

——予告——

A・D・2004 冬木市

「生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに——！」

無限の死の中で消え逝こうとするオルガマリーを、ロープランチャーからの高速移動で掻つ攫う。飛ばされた追撃は、マシユの盾が全て防いだ。

「愚か愚か愚か！ それを救って何になる？ ただ苦痛を減らしたただだけだ！ それともそれが君の慈悲かね？」

とりあえず目の前のイカれたオッサンの喚き声はほっておく。腕の中には絶望で震える所長。一か八か。どの道試さなければこれで消えてしまう。

「身体が失つても効くと良いんだけど、ここまで魔力密度が高いならひよつとして……！」

取り出すのは、かつて来たりし者たちの所有物。【黄金の羊毛】【長袖の着物】など、幾多の名で呼ばれる伝説に残る癒やしの力を持つ聖遺物。エデンの林檎。その奇跡と変わらないイス族の遺産は、当たり前のように奇跡を引き起こした。

「えっ……っ、これ……は……？」

「よしっ！ 無事に成功っ！」

腕の中で、段々と正気を取り戻していく所長。あとマシユ、そんな目で見ないで変な事しないから。

「馬鹿な、残留思念から全てを再構築したのか……!? 貴様は、一体……!?」

そして驚愕の目で見てくるもみあげふさふさ(*5)なオツサン。折角の菌類世界だ。一つカッコつけてみよう！

「あなたの言う運命フレイトって奴をぶっ壊そうとする、ただの一般人さ」
『いや絶対只者じゃないから(です)(だろ)！』

……敵と合わせて三人揃ってツッコミって息合いすぎじゃない？

A・D・2015 カルデア

「ふむふむ……君自身がサーヴァントの様でもありマスターでもあり……転移した時に、ガイアやアラヤが何かしら作用したのか……」

「本当に何なんでしょうね、今の俺の身体……」

「まあとりあえず君がエツイオの子孫ということはだ！ 君とエツイオ由来の装備を触媒にすればきつとエツイオ呼べるだろう！ さあ！ さあ！ 早く！」

「いやもうちよつとじっくり考えて呼び出す人決めましょうつてー!？」

A D . 1 5 7 3 封鎖終局四海 オケアノス

「まさか、この船にもう一度乗る事になるとはな……しかも、かつての仲間と、そして遠い子孫と共になんてな」

「ああ、変な気分だ……だが、悪くない」

「ほんと、帆船の上って気持ちがいいですね！」

操舵輪を握るのは白人の男、そして副長は大柄の黒人。更に側には軽装の黄色人種。混沌に満ちたかつてのカリブ海ですら見かけなかった光景が、このブリッグ船の上に出現していた。

「おまけに横に並走しているのは、かの伝説の大海賊、フランシス・ドレイクの操る黄金の鹿号と。凄いロマンです！」

潮風香る大海原。そして風を受け翻る大きな帆。そして対するは……

「ガツハハハハハ！ エドワード！ 久しぶりじゃねえか！」

「お前もな、黒髭！」

「そういや、俺らはまだ一度もやりあつたことが無かつたな。丁度いい、いつちよどつちが上か白黒はつきりさせようじゃねえか！」

「ああ！ かかつてこい！」

敵も大海賊、黒髭ことエドワード・ティーチ。生前は戦う事の無かつた、夢の対決が今始まろうとしていた。

A D. 1783 北米神話大戦 イ・プルーリバス・ウナム

「ヴァルハラとはヴィンランドの事だつたとはな！」

男の一振りで、ケルトの戦士が吹き飛ぶ。

「我が故郷を勝手に知らない土地にするな！」

男の一刺しで、機械人形が崩れ落ちる。

「ヴァルハラって言うより地獄に思えるんですけどー!？」

そして少年の一矢でワイバーンが落ちる。

北米のとある地で、北欧から流れ着いたヴァイキングと、その土地に生き続けてきた

モホーク族と、未来から流れオチてきた少年が戦っていた。故郷から旅立った者、故郷から追い出された者、故郷そのものが消えた者……何の因果かそんな連中がこの広大な大地で戦うことになった。全ては、失ったものを取り戻すために。

「この、新たな故郷を消してたまるものか!」「この大地は、俺達のものだ!」「えっと、アメリカも救って世界も救う!」

これは、出会う筈の無かった血族の物語。

BC・2655 絶対魔獣戦線 バビロニア

「お前達、ファランクスを組んで戦った事は?」

「生憎と、傭兵だったんで全く」「同じく、一度も」

一面が土の荒野、そして遠くには大勢の魔獣。だと言うのに、三人の声には緊張が見えなかった。

「では、見て覚える。こうして、盾と槍を構える。盾は左の仲間の身を守り、また自分の身は仲間が守り、槍は敵に向け備える」

「こうですか?」「えっと、こうか」

鷲使いが盾の後ろに隠れ、更に鷲使いの盾の後ろには立香が入る。

「うむ、よって、陣形が一番右は最も勇敢な者が請け負う。この場合は、私だな」

そう笑いかけるのは、スパルタの王、レオニダス。彼は嬉しかった。時代も世界も違
うのだが、それでも孫、そして遙か遠くの子孫と共に戦える事が。

「では、お祖父様の勇姿を拝見するとしましょう」

「じゃあ、宜しくお願いします！」

盾を構えて、壁の前で迎え撃つ。前には大量の敵、後ろには壁を守る勇者たち。そし
て横にはスパルタの戦士の血を継ぐ我が子孫たち。恐れる事など何も無い。

「来たりて取れ」

テルモピュライの伝説が、今また再現されようとしていた。